

2022年4月3日佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書6章1～6a節

説教題：主イエスを驚かせない

こんな話があります。アメリカのある神学者がテネシー州へ旅行に行き、あるレストランに入りました。食事が来るのを待っている間、上品な白髪の男性が神学者のテーブルにやって「ぜひお話したいことがあります」と言って話を始めました。「私はベン・フーパーと申します。母は未婚で私を産んだものですから、私は苦勞しました。学校では友達にからかわれ、深く傷ついた私は、人を恐れ、いつも1人でした。私が12歳の時、新しい牧師が教会に来ました。ある日の礼拝の時、いつものようにそそくさと教会を出ようとして扉にたどりついた途端、肩に大きな手が置かれました。見上げると牧師が私を真っ直ぐに見つめていました。『坊や、君は誰だね？誰の子供かね？』。牧師までが私を見下しているんだ、と思いました。しかし牧師は言いました。『ちょっと待てよ。君が誰だか知っているよ。君に似ている家族を知っている。君は神様の子供だ！君は凄い遺産を受け継いでいるんだ』」。牧師が言った「君に似ている家族を知っている」というが、イエス様の家族なのです。この個所で、イエス様は「マリヤの子」と呼ばれています。父親のヨセフは、この時、既に亡くなっていたと思われる。それでも、当時は「ヨセフの子」と呼ばれるはずなのです。それが「マリヤの子」と呼ばれているということは、イエスが、マリヤがヨセフと結婚する前に身ごもった子であることを、ナザレの人々が知っていたということを示すのではないかと思います。その意味でイエス様は、人々のある種、冷たい視線を浴びながら育てられたのではないのでしょうか。しかしその事実が、そしてそのことを知る牧師の愛が、1人の少年の人生を変えたという話なのです。この時、ベン・フーパーは州知事になっていたのです。

聖書の学びに入ります。イエス様はガリラヤ湖北岸のカペナウムという町を拠点にして、ガリラヤのあちこちで、御言葉を語り、癒しの業をしておられたようです。そのイエスが、今日の箇所では郷里のナザレに帰っておられます。ナザレは人口500～1000人の小さな村です。そこに評判のイエスが帰られた。ところが、せっかく郷里に帰られたのに「そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。イエスは彼らの不信仰に驚かれた」(5～6)とあります。なぜナザレの人々は、イエス様を驚かせるほど不信仰だったのでしょうか。この個所は、何を語るのでしょうか。ここから3つに分けてお話しします。

1：内容～ナザレの人々の不信仰

イエスは郷里の会堂で説教をされました。会堂は会堂司が管理し、集会の説教者も会堂司が指名しました。イエス様の評判はナザレにも聞こえて来ていたのでしょうか。そこで会堂司がイエスを指名したのかも知れません。イエスは素晴らしい説教をされました。2節に「それを聞いた多くの人々は驚いて言った」(2)とあります。ただ驚いただけではありません。2節で「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行なわれるこのような力あるわざは、いったい何でしょう」(2)と述べています。「どこで得たのでしょうか」と言うのは、「神から与えられたとしか思えない」ということです。そのような権威ある説教を聞いたのです。イエスは、奇跡的な業も為さったかも知れません。村人は「神が働いておられる」と思わざるを得ない体験をして、非常な驚きを感じているのです。ところが3節には「こうして彼らはイエスにつまずいた」(3)とあるのです。この「つまずいた」という言葉は、「不信仰に陥った」と訳しても良い言葉です。なぜイエス様の説教に驚いた人々が、次の瞬間にはつまずいてしまうのでしょうか。

彼らのつまずきは、次のように語られています。「この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか」(3)。何を言っているかということ、彼らは「私達はイエスのことを良く知っている」と言っているのです。ナザレは小さな村です。村人はお互いのことを良く知っている。だから「私達はイエスのことを良く知っている」と思っている。しかも、人々はイエスの出自につい

て疑いを持っている。そのように多少とも軽蔑していたその男が権威を持って説教をした。「どうして、こいつにこんなことが語れるのか」。ある英語の聖書はこの箇所を「彼らはイエスが気に入らなかった」と訳しています。気に入らなかった。なぜか。人間には「妬み」があるのではないのでしょうか。自分と遠い、関係のない人が素晴らしいことをしても、有名になっても、気にはならない。しかし、自分の近くの人、良く知っている人が有名になる、称賛を受ける、お金持ちになる…それに対して素直に喜べないものがあるのではないのでしょうか。自分達の良く知っているあのイエスが、権威を持って神の教えを語ることが気に入らない。癩に障る、妬ましい。素晴らしいと認めざるを得ないけれど、気持ちがついて行かない。いずれにしても「私達はお前のことを良く知っている。何がお前が…」というある種の近しさが、人々をイライラさせ、憤らせ、妬ませ、拒絶させたのではないのでしょうか。しかし、それは人々にとって不幸なことでした。5節「そこでは何一つ力あるわざを行なうことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった」(5)。自分達のつまずきのために、イエスを通して神が為しておられた恵みの働きを受けることができなかつたのです。

2: メッセージ～主イエスを神と仰ぐ

この箇所は何を語るのでしょうか。ナザレの村人の反応に接してイエスは言われます。「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです」(4)。イエス様の郷里とはどこでしょうか。もちろんナザレです。しかしマルコは「ナザレ」という言葉を使わないのです。郷里という言葉しか出て来ない。なぜでしょうか。それは、マルコは、イエスの「郷里」を「ナザレ」に限定せず、もっと広い意味で使おうとしているからではないのでしょうか。「ヨハネ福音書」にこうあります。「この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」(ヨハネ 1:11)。この世界は、神様によって、イエス様によって創造されました。{「天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、見えないもの…すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです」(コロサイ 1:16)}。宮崎県も、佐土原も、イエス様の郷里(くに)なのです。そう考えると「イエスの郷里である、宮崎の私達1人1人は、本当にイエスのご存在に相応しく相対しているのか。イエスが私達1人1人を通して、働きたいと願っておられる、その働きを制限するような不信仰はないのか」、この箇所は、そのことを問うて来るのではないのでしょうか。

ここでいう「不信仰」とは何でしょうか。ナザレの人々は、ユダヤ人ですから、もちろん神を信じています。しかし「イエスが神の子、神の救い主である」ということを信じるのが出来なかつたのです。「私達が良く知っているあの『マリヤの子』ではないか。この前まで大工をしていたあいつではないか」としか見なかつた。最後までイエス様ことを「神的な存在」として見る事が出来なかつたのです。それがここで言われている「不信仰」なのです。その「不信仰」がイエス様の業を邪魔しているのです。

三浦綾子さんが求道をしている時、「聖書にある、イエス様が水の上を歩かれたとか、そういう奇跡はつまずきにならなかつた、というか、どうでも良かった、問題は、イエスが本当に神の子であるのか、神であるのかどうか、その一点だった」と言っておられます。イエスが神の子なら、奇跡を行っても何の不思議もない、ということでしょう。私達も改めて確認しなければならないのは、イエスを神の子、いや神と信じるかどうか、ということです。言葉を換えると、『私達の信じる神は、イエス・キリストにおいてご自分を現された神である』ということをしつかり押さえないといけないということです。私達は、ナザレのイエス、人として生きられたイエスを、神の子、いや神とするのです。

そうした時、イエス様から見て、私達にイエス様を「私の神」としない不信仰はないのでしょうか。イエス様を、「神の子」「私の神」として相応しく相対しているのでしょうか。私達は、イエス様を「私の主」、「私の神」として、イエス様の前に膝を屈めるような信仰生活を送りたいと思うのです。その時、私達の中で、あるいは私達を用いて、イエス様が素晴らしいことをして下さるに違いないと思います。この箇所は、そう語るのです。

3: 適用～主イエスの前に膝を屈める

「イエス様の前に膝を屈めるとはどのようなことか」2つ申し上げます。

1) 主の御心を行う

ナザレの人々は、イエス様を拒否しました。それは、言葉を換えると、イエス様の言葉を、神の言葉として受け入れることが出来なかったということです。「イエスの言葉が神の言葉などであるはずがない。なぜイエスに神の言葉を語る事が出来ようか」、そう言ってイエス様の言葉を神の言葉として受け入れることを拒否しました。私達はどうでしょうか。

私は以前、「私達はイエスの言葉に対して誠実でないことを告白し、悔い改めましょう」というメッセージを聞いたことがあります。私達はイエス様の言葉を聞く、でも本当にイエスの言葉に対して—(あるいはイエスの言葉を土台とした聖書の言葉に対して)—神様の私への語りかけとして誠実に対応しているのでしょうか。ナザレの人々は、イエスを自分達の知識で判断して、イエス様の言葉につまずきました。その意味で、イエスに膝を屈めるとは、自分の常識の世界、そこを飛び出すようにして、御言葉に踏み出すことではないのでしょうか。その時、御言葉を通して私達において、神が働かれるのではないのでしょうか。

私は、あのアーミッシュの人達のことを思うのです。16年前、アメリカ・ペンシルベニア州にあるアーミッシュの村の学校に、近所に住む男が猟銃を持って乱入して、5人の子供を殺して、自分も自殺しました。しかし、それから数日後、アメリカの人々が、その惨劇以上に衝撃を受けるニュースが流れて来た。アーミッシュの人達は、犯人の妻の所へ行き—(そこに父親もいましたが)—押し寄せる怒りや悲しみを振り払ってこう言いました。「私達は彼を赦します。あなた方も家族を亡くしました。悲しみを分かち合いましょう」。その言葉を犯人の妻は「信じられない」という顔で聞いたのです。墓地で犯人の葬儀が寂しく行われていた時、丘の向こうから喪服を着た大勢のアーミッシュの人達がやって来て、妻を労わりながら静かに葬儀に参列したのです。放送していた放送局のスタッフが「やっぱり来た。何という人達だ」と言うのです。全米から送られて来た義捐金は犯人の家族と分け合いました。暴力に対して憎しみで応えるのではなくて、「愛と赦し」で応えたのです。このことに全米が驚きました。なぜ、彼らがそういうことをしたのか。イエス様は「我らに罪をおかす者を我らがゆるすごとく、我らの罪をも赦したまえ—(私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました)」(マタイ 6:12)という祈りを教えて下さいました。「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(マタイ 5:44)と言われました。「赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます」(ルカ 6:37)と言われました。彼らは、その言葉を、自分達に対する神の言葉として受け取り、その通り赦したのです。自分達も赦された者だから人を赦したのです。彼らの生き方は、全米の人達を揺さぶりました。北米のアーミッシュに対する見方は、変わりました。アーミッシュも、私達と同じメノナイトの群れですが、北米のメノナイト教会も目を覚まさせられました。イエス様は、彼らを通して、大きく働かれたのです。

イエス様の言葉に踏み出す。それがイエス様に膝を屈めるといふことの1つの在り方ではないのでしょうか。そして、そこにイエス様の御業を豊かに経験する秘訣があるのではないのでしょうか。

2) 主に対して怒らない

3節「彼らはイエスにつまずいた」(3)。この「つまずいた」という言葉を、多くの英語の聖書は「腹を立てた、怒った」と訳しています。イエスは、神の愛をもってナザレの人々に本気で関わろうとされました。しかし村の人々は、イエス様を理解することが出来ませんでした。彼らの意に沿わなかった。そして「私達は良く知っている」という思いが先に立ち、反感を持ったのです、怒ったのです。

私達はどうでしょうか。イエス様に対して怒ることはないのでしょうか。妬みではありません。イエス様がしておられることを理解出来ない、それで怒ることはないのでしょうか。以前も申し上げましたが、私は今年の春、鬱状態になって、その中で信仰もボロボロになって、自分に与えられた状

況に納得出来ずに、主に対して怒りました。主に食って掛りました。皆様は、イエス様に対して怒ることはあられないでしょうか。しかし、もしかしたらそれは、私達が「主のことは知っている、こんな方だ、私の意に沿った形で働いてもらわなければ困る」と、主に対する間違っただけの近しさを感じているからではないでしょうか。しかし主は、私達を遙かに越える方です。そして聖書は、時に主が私達を子として取り扱うが故に、私達を「主に似た者」に変えるという目的のために、永遠の祝福を与えるために、練り聖めることがあると教えるのです。練り聖められる時、痛みがある。でも、こんな話があります。ある所で大火事があり、何もかも灰になりました。しかし、その中で形を留めて残ったものがあつたのです。それはタイルでした。一度、練られ、火を通ったタイルは、大火事に耐えたのです。主は私達を訓練し、そぎ取る部分をそぎ取り、身につけるべきものを身につけさせ、主に似た者にするために、私達を取り扱うということがあるのだと思います。内村鑑三は言いました。「キリストは…私の願わない所に私を連れて行く…しかし、そのようにしてキリストに取り扱われることによって、私は変えられ、私が少しずつ死んで、私の中でキリストが少しずつ生きるようになったのです。私は、これまでの生涯が自分の願った通りでなかったことを感謝しています」(内村鑑三)。

私達夫婦はこれまでの働きの中で色々な失敗をして来ました。ある時、大きな失敗をしました。それは2人にとって試練の時でしたが、ある方が言われました。「神様に愛されているからですよ」。その方は「主に愛されているから、主が関わろうとしてこのことも赦されたのだと思いますよ」と言って下さったのです。目が開かれるような気がしました。そして実際、それは祝福に変えられたのです。

私達は、辛いところ、痛いところを通る時に、初めて少しずつ変えられて行くのではないのでしょうか。そのようにして主は、私達を少しずつ天国に相応しい者に変えて行かれるのではないのでしょうか。ある牧師が言いました。「主は、良く見えることも、悪く見えることも、嬉しいことも、嬉しくないことも、全てを用いて私達を導いて行かれる」。主を信じて生きて行く上で大切なことは、それを受け入れることではないでしょうか。状況がマイナスに見える時ほど、その状況を用いて主が私に深く関わろうとされている、永遠の祝福を与えようとしておられる、それを信じて行くことだと思います。しかし、その渦中にある時は辛いですから、主にしがみつような祈りをもって主に訴えながら、そこを歩いて行くことだと思います。

4: 終わりに

3つのことをお話ししました。私達は、イエス様を拒否して恵みを失うのではなく、イエス様を「神の子」、いや「私の神」としてお迎えして、神の祝福に与る信仰生活を送りたいと願います。